

「これからの患者—医療者関係とインフォームド・コンセント」

東京医療センター教育研修部臨床研修科医長 尾藤 誠司 先生

この20年で、我が国の患者—医療者関係は大きな変化がありました。それは、一言でいえば、医療者側の独善的な価値観に基づいて医療の方針が決められ、行われていた関係から、患者側の自律性が尊重される関係への変化です。この変化は、基本的にはより望ましい変化であるといえます。しかしながら、詳細な情報を提供した上で患者さん自身に診療方針の選択権を委ねるという診療のスタイルは、一方では、医療者の専門職としての役割意識や責任感に好ましくない影響を与えているかもしれません。本講演では、医療者が陥る独善的な思考に対して、自分たちがどれほど謙虚になることができるのかということとともに、その上で医療者が自らの職責をどのように考え、患者さんと向き合うかについて皆さんとともに考える機会としたいと思います。後半では、診療現場における具体的な場面として、現代の患者—医療者関係の中で、インフォームド・コンセントがどのようになされるべきかについて、そして、新しいインフォームド・コンセントのコンセプトとその実践について議論を行いたいと思います。

【略歴】

尾藤 誠司 (びとう・せいじ)

東京医療センター臨床研修科医長。

1990年、岐阜大学医学部卒。国立長崎中央病院、国立佐渡療養所などを経て、95～97年、米 UCLA 公衆衛生大学院・一般内科に学び、97年から東京医療センター総合内科に勤務。04～07年に国立病院機構本部の臨床研究推進室長を務めた。2008年より現職。著書に『医師アタマ 医師と患者はなぜすれ違うのか?』（医学書院）、『「医師アタマ」との付き合い方—患者と医者はわかりあえるか』（中公新書ラクレ）など。